

『羊の気持ち』 ヨハネ10:1-10

10:1 よくよくあなたがたに言うておく。羊の囲いにはいるのに、門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、強盗である。

10:2 門からはいる者は、羊の羊飼である。

10:3 門番は彼のために門を開き、羊は彼の声を聞く。そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。

10:4 自分の羊をみな出してしまうと、彼は羊の先頭に立って行く。羊はその声を知っているの、彼について行くのである。

10:5 ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである」。

10:6 イエスは彼らにこの比喩を話されたが、彼らは自分たちにお話しになっているのが何のことだか、わからなかった。

10:7 そこで、イエスはまた言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。わたしは羊の門である。

10:8 わたしよりも前にきた人は、みな盗人であり、強盗である。羊は彼らに聞き従わなかった。

10:9 わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。

10:10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。

●序論

最近よくニュースで話題になるのは、SNS上で行われる詐欺です。有名な経済問題に長けた知識人の名をかたって、各所に広告がなされていて、一見どころかその中に入り込んで、偽物と気づかせないほど巧妙な罠が用意されている…ということで話題です。今日イエスさまは、あの9章の盲人の癒しとパリサイ人たちとの問答との続きにこう告げられました。

10:1 よくよくあなたがたに言うておく。羊の囲いにはいるのに、門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者は、盗人であり、強盗である。

「よくよくあなたがたに言うておく」つまり「はっきり言うておく」（新共同訳）、これは、イエスさまが大切なことだからよく聞いてほしいと語る表現なのです。それは”盗人がくる。強盗が現実にくる”ということです。10節にこうありました。

10:10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかならない。…

そんな現実の中で、わたしたちクリスチャンは「羊」と表現されます。

聖書は羊を語る時、それは「弱さ」「迷いやすい」存在として描かれています。だからこそ、羊には、ちゃんとした羊飼いが必要だというわけです。

●本論

I. 羊飼いであり門である方を知る

イエスさまは、「よくよくあなたがたに言うておく」と前置きして、まず「門からでなく、他のところから乗り越えて来る…、盗人、強盗」について語り、その一方で、「2 門からはいる者は、羊の羊飼いである」と言われました。

そして来週見ていきますが、イエスさまははっきり言われています。

10:11 わたしはよい羊飼である。

そして次のようにも言われます。

10:7 そこで、イエスはまた言われた、「よくよくあなたがたに言うておく。わたしは羊の門である。

では、イエスさまは、羊飼いなのか？ それとも羊が出入りするための羊の門なのか？、どっちなのか？ そう思って読むと混乱してしまいます。

ここでは、イエスさまはご自身のことを、羊の門であり、また羊を導く羊飼いであると語っているのです。

つまり、わたしたちは羊として、自分たちの羊飼についていくことが大切ですね。そして羊の門、つまりイエスさまご自身の十字架の福音を通して、わたしたちのもとに来られるイエス様ご自身に注目するのです。

実は、わたしたちが世の中を生きていると、結構多くの惑わしにさらされます。

イエスさまでない者が、もっといいものを、もっと手軽に…と言って、「門からでなく、ほかの所からのりこえて」、福音以外の祝福を語るのです。

色々しんどいところを通るわたしたちの歩みを、巧みな言葉で惑わす、キリスト以外の魅力的な声を聴くことがあります。”羊の気持ち”はざわつくことも…。

そんな中でも、あくまでもキリストを待ち望み、その声と導きに頼ることを大切にしたいのです。そしてイエスさまとの対話、祈りを大切にすることです。

ある聖書の学びのテキストにこんな風に記されていました。

★多くの場合、私たちが失敗するのは、神に相談することを怠ったからです。

そして、言います。「私たちは主に相談すべきです！！」と。

そして聖書ははっきりこう語ります。

マタイ6:33 まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。

神さまとの関係の中に生きるからこそ、神さまに相談できるからこそ、受け取ることのできる、神さまの約束や祝福があると、こころから期待できるのです。

II. 御声を聞き分ける。

「導き」というものは、非常に個人的なものです。

神の霊が、信じる私たちのうちに住み、働き、そして語ってくださいます。私たちは神さまとのコミュニケーションの中に入れていただいています。

そういう対話の楽しみの中で自然導かれていくのです。

そんなわたしたちだからこそ、まずイエスさまの御声を聞き分けることが大切です。

ヨハネ10:3-5 「そして彼は自分の羊の名をよんで連れ出す。…彼は羊の先頭

に立って行く。羊はその声を知っているのに、彼について行くのである。ほかの人には、ついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからである」。わたしたちの人生、信仰生活において「イエスさまのみ声を知る」ことの大切さを再確認してほしいのです。それは日々の信仰生活の積み重ねによります。

聖書からそのありのままの、神さまのみ声を聴くことです。

そのために、聖書を少しずつでも読み思いめぐらすこと。そしてそれをもって神さまに祈ること。そして礼拝に集うこと、また恵みを兄弟姉妹と分かち合うことです。

聖書は語ります。

コロサイ3:16「キリストの言葉を、あなたがたのうちに豊かに宿らせなさい。そして、知恵をつくして互に教えまた訓戒し、詩とさんびと霊の歌とによって、感謝して心から神をほめたたえなさい。」

考えてみると、古来変わることはない信仰生活への招きです。

そしてイエス・キリストの招きのみ声を聞き分け、この方についていくのです。

10:4 …彼は羊の先頭に立って行く。羊はその声を知っているのに、彼について行くのである。

Ⅲ. その御声が人を生かす

10:6 イエスは彼らにこの比喩を話されたが、彼らは自分たちにお話しになっているのが何のことだか、わからなかった。

先週まで見てきた9章においての盲人の癒し。この人の癒しの事実をどうにか否定し、イエスさまを救い主・キリストだと認めたくないパリサイ派人たちの反応です。

「自分たちにお話しになっているのが、何のことだか、わからなかった」と。

だれよりも聖書を読み精通しているはずの人たちでした。

しかし、彼らにはイエスさまがだれであるかがわからなかったのです。

そして、自分たちがだれを否定しているのかわからなかったのです。

そうして気づく心からは遠く離れてしまいました。9章41節の御言葉

9:41 (LB)「もしあなたがたが盲目だったら、罪に問われませんでしょ。しかし、何もかもわかっているとあくまで言いはるので、あなたがたの罪はそのまま残るのです。」

罪に閉ざされた心は、神さまのなされる福音のわざがわかりません。わからないでいてもわかっているかのようにふるまう心と態度が、周囲の人々を惑わせ傷つけてしまう様子が、あのいやされた盲人に対する彼らの態度としても描かれています。

実際に、彼らによって会堂から追い出された、その元盲人の人の失意はどれほどのものだったでしょうか。

しかし、イエスさまはその彼に御声をもって呼びかけ、彼の前にご自身を救い主・キリストとしてあらわして導かれたのです。あの元盲人のすがたと感動は印象的です。

9:38 すると彼は、「主よ、信じます」と言って、イエスを拝した。

聖書はこのような人のありさまを今日のところからこう表現しています。

10:9 わたしは門である。わたしをとおってはいる者は救われ、また出入りし、牧草にありつくであろう。

さいごに)

今日、10章の最初のところで聖書は、羊たちは、自分の羊飼いの声を知っているので、彼についていく。けれどもほかの人にはついて行かないで逃げ去る。その人の声を知らないからだ…あります。

そんなところから「羊の気持ち」と題してお話したのは、隙間をついてわたしたちの心をざわつかせ、足をすくってつまずかせるような、さまざまな巧みな惑わしの声がこの世にはたくさんあるからです。

(以前に伺った、一人の女性の証し)

キリストの声を聴き、そしてこの方についていくことで、その喜び、安心、期待が、あふれる。その人の言葉も声も生きざまも変えられているありさまがそこに描かれているのです。

イエスさまはまことの羊飼いです。そしてキリストご自身がわたしたち羊の門です。その十字架の命の犠牲を通らせてくださりわたしたちの弱さや悩みや恐れをも覆いやして、緑の牧場に導かれるお方としてわたしたちを招いてくださっているです。

ここに命の豊かさが、生き生きとした喜びが用意されていることをぜひ今日覚えていただきたいのです。